

# 大徳寺本『拾遺漢語灯録』について

中 野 正 明

## はじめに

『拾遺漢語灯録』は法然上人（以下、尊称を略す）の遺文集である『黒谷上人語灯録』（以下、『語灯録』と略称す）拾遺のうち漢語篇を意味するが、『語灯録』の文献学的研究において従来最も疑問視されていたものである。それが、近年曾田俊弘・梶村昇の両氏によって「新出『大徳寺本拾遺漢語灯録』について」（『浄土宗学研究』第三号、平成八年）に滋賀県甲賀郡水口町立図書館所蔵本（後述するが、水口町大徳寺より委託管理されて所蔵することから大徳寺本と称す、以下同じ）が紹介され、『拾遺漢語灯録』の記述が中世に遡ることを証明できる可能性が出てきた。『語灯録』研究の面からも総合的に評価することができるようになるなど、この大徳寺本発見の意義は大きい。今後は法然遺文研究の資として

大いに役立ち法然研究に新たな進展が計られることになるものと思われる。そこで、本稿ではまず基礎的作業として必要と考えられる大徳寺本と正徳版との校合、そして法然遺文を所収する他の諸本との比較を行い、大徳寺本の文献としての史料的可能性について考察しようとするものである。

## 一

法然の初期遺文集としては、仁治二年（一二四一）頃に源智の門弟によって編集されたと考えられる醍醐三寶院所蔵の『法然上人伝記』（以下、『醍醐本』と称す）、仁治二年から宝治二年（一二四八）頃までに信空系の者によって編集されたと想定される高田専修寺所蔵の『西方指南抄』（以下、『指南抄』と称す）、良忠の

弟子了慧道光により文永十一年（一二七四）から翌十二年にかけて編集された『語灯録』の三本をあげることができる。このうち、『語灯録』は漢語篇（以下、『漢語灯録』と称す）一〇巻に「無量寿経釈」以下二二篇、和語篇（以下、『和語灯録』と称す）五巻に「三部経釈」以下二四篇の遺文を所収、さらに拾遺篇として漢語体のもの（これを『拾遺漢語灯録』と称す、以下同じ）一卷に「三昧発得記」以下五篇、和文体のもの（以下、『拾遺和語灯録』と称す、以下同じ）二巻に「登山状」以下一二篇を所収するように最も大掛かりな編集となっている。拙著『法然遺文の基礎的研究』（法蔵館、平成六年）においては、これら三本の法然遺文集について文献学的な考察を施し概ねその信憑性を証することが出来たものと考えているが、その過程において『語灯録』のうちとくに『拾遺漢語灯録』については課題を残す結果となった。

ここで『語灯録』各篇の諸本について整理しておくことにする。まず『漢語灯録』には恵空得岸書写本を伝承する写本（以下、恵空本と称す）と、良照義山印行本（以下、義山本と称す）の二系統の伝承本が存し、双方の記述内容および字句にかなりの相違点があることから、両本の信頼性をめぐる考察の必要性に迫られ、現在では良照義山が何らかの意図によつて記述内容、表現等に手を加え改変していることが認められるとして、恵空本の方に信を置くべきであるとする見解が一般的となつて<sup>①</sup>いる。そ

のなかで、『漢語灯録』には前述の正徳五年（一七一五）に印行された義山本（以下、正徳版と称す）のほかに、恵空本として千葉県市川市善照寺と大谷大学図書館とに各一本ずつ所蔵しているが、この両本ともに江戸時代末期から明治時代にかけての新しい写本である。『和語灯録』にも同様に正徳五年印行の義山本があり、ほかに寛永二十年（一六四三）に印行された片仮名本をあげることができるが、最も信頼性の高い貴重本として龍谷大学図書館所蔵の元亨元年（一三三二）版<sup>②</sup>がある。写本としては近年確認されたものとして江戸時代中期頃のもの<sup>③</sup>と見られる旧西村問紹氏所蔵本（現在佛教大学図書館所蔵）、中世に遡るものとして安居院西法寺所蔵の鎌倉時代末期から室町時代初頭にかけての写本と見なされる残欠本<sup>④</sup>が紹介されている。『拾遺和語灯録』については『和語灯録』の場合と同様で各々の末尾に付属する形で伝承している。そこで、『拾遺漢語灯録』であるが、これは従来正徳版の義山本でしかその存在を確認することが出来なかったわけである。

## 二

大徳寺本は前掲所論のうち曾田氏解説によれば、『郷土資料並古書類 註解附目録』（鳥居忠夫・石川季男編、水口町教育委員会・水

口町立図書館刊、昭和五十二年）によって確認されていたというが、これが実際に『語灯録』研究のうえで極めて重要な位置付けをもつもので、法然遺文集の研究にとって意義深い文献であることについては、今回の曾田氏の発見によって斯界に紹介され初めて認知されることとなった。

体裁は縦二七センチメートル、横一九・五センチメートル、墨付二七丁、外二丁、袋綴じの冊子本ということである。表紙に「滋賀県水口町大徳寺」の角印があり、表紙裏に「大徳寺什」の書がありそのうゑに「家松山藏書」という丸印があるという。そして、一丁表の脚部中央に「家松山大徳寺」の角印が捺されているということである。

大徳寺は滋賀県甲賀郡水口町字赤堀に位置する浄土宗寺院であるが、『浄土宗寺院由緒書』<sup>(5)</sup>によると、末寺一一箇寺を有する知恩院末寺院として確認され、成立年代については不詳であるが、天正十年（一五八二）に水口城主中村一氏が水口城西に浄慶寺を建立し小田原大蓮寺から叡譽を開山として招請したことに始まるとしている。叡譽が徳川家康の家臣本多忠勝の伯父に当たることから、関ヶ原合戦の後家康が参詣して寺領二九石を寄進し、山号を家松山と命名したという。家康はその後第二代岌誉の時代にも立ち寄り宿所とし大徳寺という寺号を与えたことなどが記されている。

ところで、大徳寺本の奥書にはつぎのようにある。

右此一冊雖<sup>レ</sup>令<sup>ニ</sup>写本之章段文字乱脱<sup>一</sup>聊加<sup>ニ</sup>了簡奉<sup>ニ</sup>書写<sup>一</sup>者也、後輩感<sup>ニ</sup>得正本<sup>一</sup>者必<sup>ニ</sup>乱<sup>レ</sup>之、

維時元禄十五年十二月月上旬

六十歳

興譽 恩哲書<sup>レ</sup>之、

南無阿彌陀佛

興譽

(中阿)

この奥書によって大徳寺本が興譽恩哲なる者の筆写によるものであることが分かる。興譽恩哲については前掲所論の曾田氏解説によると安土浄厳寺の一四世住持であったという。そして、浄厳院所蔵『漢語灯録』第七、『仮臥拔書』、『浄土諸要文類』、『看病用心鈔并十楽』、『神子問答拔書』の五冊に興譽恩哲伝領の署名が確認される。興譽恩哲はこの大徳寺本を写本を底本として書写したようで、写本の章段・文字を乱脱にするかもしれないが了簡を加えて書写すると記している。さらに後輩に対して正本を得たならば必ず糺すようにと言っているように、興譽恩哲は大徳寺本を書写するに当たって疑問な点を感じていたようである。

梶村昇氏は前掲所論のなかで、大徳寺本の発見によって『拾遺漢語灯録』が『醍醐本』を収録したものであったことが証明されると主張される。その理由として、まず両書の「浄土随聞

記「〔拾遺漢語灯録〕と「一期物語」前半部（『醍醐本』）、〔臨終祥瑞記〕（『拾遺漢語灯録』）と「御臨終日記」前半部（『醍醐本』）、〔三昧発得記〕（『拾遺漢語灯録』）と「御臨終日記」後半部（『醍醐本』）とは、文章の出入りがあるとはいえ対応していることをあげ、とくに『醍醐本』『御臨終日記』前半末尾の「上人入滅以後及三十二年」以下の記述は、『醍醐本』編集の意図を述べた記述であり『醍醐本』にのみ有用なものであるが、これが『拾遺漢語灯録』『臨終祥瑞記』の末尾にも記されているということは、『拾遺漢語灯録』が『醍醐本』を写写していたということになる指摘される。また、大徳寺本の「浄土宗見聞」の第九問と第十問の間に禅勝房との問答いわゆる「十一箇条問答」の記述が存したことを意味する内容の註記があるが、このことは『拾遺漢語灯録』が編集された当時の原本に「十一箇条問答」の記述が存在していたことを証するとともに、ほかに「三心料簡事」も含まれていた可能性を想定することになると述べられている。そして、「三心料簡事」もはじめから『拾遺漢語灯録』に所収されていたが、この法語には悪人正機説も含まれていたために、これを正徳版『拾遺漢語灯録』の鐫木光明寺良求奥書に見られる建武四年（一三三七）の老宿達の治定に際し削除するという改変が行われたものと考察し、宝永二年（一七〇五）の知恩院第四十二世白誓至心跋文は、『醍醐本』の記述につ

いて以前から抱いていた疑問が伊豆薬王寺にある武州金沢文庫の蔵本を確認したことによりたちまちに晴れたため、義山に命じてこの書室に収めたことを意味するものである。筆者はこうした一連の梶村氏の見解に些か異を唱えるものであるが、詳細は考察を進めながら明かしていきたい。

本論に入る前に前掲所論には大徳寺本文の影印と翻刻を掲載し、研究資料としての便宜が計られているが、翻刻について若干の誤植・誤読と思われる箇所が見られるため、これらを指摘し後考の資としたい。

(丁数表裏・行数)		(誤)	(正)
二丁表・5行目	現 <sub>レ</sub> 之	現 <sub>レ</sub> 之	現 <sub>レ</sub> 之
七丁裏・5行目	是非 <sub>レ</sub> 行 <sub>ハ</sub> 解 <sub>ニ</sub> 者	是非 <sub>レ</sub> 行 <sub>ハ</sub> 解 <sub>ニ</sub> 者	是非 <sub>レ</sub> 行 <sub>ハ</sub> 解 <sub>ニ</sub> 者
十一丁表・2行目	不 <sub>レ</sub> 可 <sub>レ</sub> 解 <sub>ニ</sub> 脱 <sub>ニ</sub> 生死 <sub>一</sub> 也	不 <sub>レ</sub> 可 <sub>レ</sub> 解 <sub>ニ</sub> 脱 <sub>ニ</sub> 生死 <sub>一</sub> 也	不 <sub>レ</sub> 可 <sub>レ</sub> 解 <sub>ニ</sub> 脱 <sub>ニ</sub> 生死 <sub>一</sub> 也
十一丁表・4行目	不 <sub>レ</sub> 可 <sub>レ</sub> 解 <sub>ニ</sub> 脱 <sub>ニ</sub> 生死 <sub>一</sub>	不 <sub>レ</sub> 可 <sub>レ</sub> 解 <sub>ニ</sub> 脱 <sub>ニ</sub> 生死 <sub>一</sub>	不 <sub>レ</sub> 可 <sub>レ</sub> 解 <sub>ニ</sub> 脱 <sub>ニ</sub> 生死 <sub>一</sub>
十一丁裏・1行目	拂 <sub>ニ</sub> 上 <sub>ニ</sub> 池 <sub>ニ</sub> 中 <sub>ニ</sub> 塵 <sub>一</sub>	拂 <sub>ニ</sub> 上 <sub>ニ</sub> 池 <sub>ニ</sub> 中 <sub>ニ</sub> 塵 <sub>一</sub>	拂 <sub>ニ</sub> 上 <sub>ニ</sub> 池 <sub>ニ</sub> 中 <sub>ニ</sub> 塵 <sub>一</sub>
十一丁裏・8行目	于時	于時	于時
十二丁表・4行目	可 <sub>ニ</sub> 参勤 <sub>申一</sub>	可 <sub>ニ</sub> 参勤 <sub>申一</sub>	可 <sub>ニ</sub> 参勤 <sub>申一</sub>
十三丁表・1行目	全 <sub>レ</sub> 不 <sub>レ</sub> 許 <sub>ニ</sub> 凡 <sub>ニ</sub> 夫 <sub>ニ</sub> 往生 <sub>一</sub> 也	全 <sub>レ</sub> 不 <sub>レ</sub> 許 <sub>ニ</sub> 凡 <sub>ニ</sub> 夫 <sub>ニ</sub> 往生 <sub>一</sub> 也	全 <sub>レ</sub> 不 <sub>レ</sub> 許 <sub>ニ</sub> 凡 <sub>ニ</sub> 夫 <sub>ニ</sub> 往生 <sub>一</sub> 也
十三丁表・1行目	諸宗所談	諸宗所談	諸宗所談
十三丁表・4行目	為 <sub>ニ</sub> 勝 <sub>ニ</sub> 他 <sub>一</sub> 也云	為 <sub>ニ</sub> 勝 <sub>ニ</sub> 他 <sub>一</sub> 也云	為 <sub>ニ</sub> 勝 <sub>ニ</sub> 他 <sub>一</sub> 也云

十三丁表・7行目	是故 <sub>ニ</sub>	就 <sub>レ</sub> 何文 <sub>ニ</sub> 立 <sub>レ</sub> 之給耶	是故 <sub>ニ</sub>	就 <sub>レ</sub> 何文 <sub>ニ</sub> 立 <sub>レ</sub> 之給耶
二十丁表・1行目	就 <sub>レ</sub> 何文 <sub>ニ</sub> 立 <sub>レ</sub> 之給耶	故知 <sub>ニ</sub> 智恵 <sub>ニ</sub> 分際 <sub>ニ</sub>	故知 <sub>ニ</sub> 智恵 <sub>ニ</sub> 分際 <sub>ニ</sub>	故知 <sub>ニ</sub> 智恵 <sub>ニ</sub> 分際 <sub>ニ</sub>
二十丁表・8行目	聊御平癒之時	聊御平癒之時	聊御平癒之時	聊御平癒之時
二十一丁表・4行目	若 <sub>ク</sub> 于人々	若 <sub>ク</sub> 于人々	若 <sub>ク</sub> 于人々	若 <sub>ク</sub> 于人々
二十三丁裏・6行目	不信 <sub>ニ</sub> 佛法 <sub>ニ</sub>	不信 <sub>ニ</sub> 佛法 <sub>ニ</sub>	不信 <sub>ニ</sub> 佛法 <sub>ニ</sub>	不信 <sub>ニ</sub> 佛法 <sub>ニ</sub>
二十四丁裏・1行目	同在 <sub>ニ</sub> 見聞 <sub>ニ</sub> 奥 <sub>ニ</sub>	同在 <sub>ニ</sub> 見聞 <sub>ニ</sub> 奥 <sub>ニ</sub>	同在 <sub>ニ</sub> 見聞 <sub>ニ</sub> 奥 <sub>ニ</sub>	同在 <sub>ニ</sub> 見聞 <sub>ニ</sub> 奥 <sub>ニ</sub>
二十四丁裏・8行目	同在 <sub>ニ</sub> 見聞 <sub>ニ</sub> 奥 <sub>ニ</sub>	同在 <sub>ニ</sub> 見聞 <sub>ニ</sub> 奥 <sub>ニ</sub>	同在 <sub>ニ</sub> 見聞 <sub>ニ</sub> 奥 <sub>ニ</sub>	同在 <sub>ニ</sub> 見聞 <sub>ニ</sub> 奥 <sub>ニ</sub>

このほかにも校訂の方法としては、二十二丁表2行目に「建久元年十一月十七日」とある箇所は「建久元年十一月十七日」と、二十三丁表2行目に「同廿日己時」とある箇所は「同廿日己時」と、いずれも校訂注を付して正すべきであり、また二十五丁表8行目に「於<sub>下</sub>犯<sub>ニ</sub>四重五逆等之重罪<sub>ニ</sub>候<sub>上</sub>者<sub>ニ</sub>」とある箇所の返り点「上」が重複しているためにこれに「衍」を付して、「於<sub>下</sub>犯<sub>ニ</sub>四重五逆等之重罪<sub>ニ</sub>候<sub>上</sub>者<sub>ニ</sub>」とする必要があるし、さらに二十七丁裏1行目奥書の冒頭に「(奥書)」と註記したり、同3行目「興誓恩哲」に重ねて捺されている二種類の角印の印影と、その印文「興誓」「中阿」を註記するなど、原型を忠実に踏襲した翻刻が望まれる。それにしても、ここに指摘した箇所は九牛の一毛に過ぎず、いずれも全体に影響を及ぼす程のものではない。

### 三

大徳寺本の史料性格を検討するにあたり、大徳寺本・正徳版・『醍醐本』の三本相互の關係について考えることにする。はじめに、各々に所収される遺文・記録の題目を比較するとつぎのようである。

大徳寺本	正徳版	『醍醐本』
三昧発得記	三昧発得記	(三昧発得記)
夢記	夢感聖相記	
浄土宗見聞	浄土随聞記	一期物語
臨終記	臨終祥瑞記	御臨終日記
御教書御請	答博陸問書	
	別伝記	
	(十一箇条問答)	
	(三心料簡事)	

大徳寺本と正徳版の題目は「三昧発得記」を除くすべてにおいて相違している。これはいったいどういうことであろうか。どちらが原型に近いのか、あるいはまたどちらも後世に改変もしくは作成されたものなのか重要な問題点が提起される。『醍醐本』はそれ自体が三部構成となっていて題目としては「別伝記」を含めて三点であるが、実際には括弧書で示したように六箇の

ような箇所である。

遺文及び記録から成っており、そのうちの「御臨終日記」後半部の記述が『拾遺漢語灯録』のいわゆる「三昧発得記」に当たる。また「一期物語」においても後半部の「十一箇条問答」「三心料簡事」を除く前半部の記述が、『拾遺漢語灯録』の大徳寺本では「浄土宗見聞」、正徳版では「浄土随聞記」として収録する遺文と共通するわけである。『拾遺漢語灯録』と『醍醐本』の所収遺文・記録を全体的に比べると、『醍醐本』には大徳寺本で「夢記」、正徳版で「夢感聖相記」と称するもの、そして大徳寺本では「御教書御請」、正徳版では「答博陸問書」と称するこの二つの遺文・記録に当たるものが『醍醐本』の方にはなく、反対に『醍醐本』所収の「別伝記」と「一期物語」の後半部に掲載されているいわゆる「十一箇条問答」と「三心料簡事」は『拾遺漢語灯録』の方にはない。この時点で普通であれば『拾遺漢語灯録』と『醍醐本』の直接的な関係を論ずることに無理があることが諒解されるところである。このように、所収する題目の比較から大徳寺本と正徳版がまったく別系統のものであることが想定される。

さらに、記述内容と比較していくと同じ『拾遺漢語灯録』であるにもかかわらず、大徳寺本と正徳版には文体に大きな隔たりが存することが明瞭になる。しかるに、両者には所収体裁を中心として共通性の認められる部分もある。例示するとつぎの

大徳寺本『拾遺漢語灯録』

正徳版『拾遺漢語灯録』

(イ) 三昧発得記第一

黒谷自筆記

三昧発得記第一

(ロ) (上略) 三昧発得記畢、

三昧発得記

源空自筆記之

(ハ) 建久九年五月二日註之

源空

建久九年五月二日註之

源空

(ニ) 浄土宗見聞第二

勢観上人記

浄土随聞記第二

勢観上人著

(ホ) 殊於<sub>ニ</sub>戒法門<sub>ニ</sub>者相<sub>ニ</sub>承<sub>ニ</sub>源空<sub>ニ</sub>之人也<sub>云云</sub>

私云、以此言、知、就付  
属文<sub>ニ</sub>立<sub>ニ</sub>宗義<sub>ニ</sub>事顯然也、

円戒<sub>ハ</sub>法門<sub>ハ</sub>乃予之弟子也、  
乃知、依、付属文<sub>ニ</sub>而立<sub>ニ</sub>宗義<sub>ニ</sub>也、  
私云、  
以此

(ヘ) 又上人或時、聖道門<sub>ハ</sub>喩如<sub>ニ</sub>祖

又一時師語曰、聖道門<sub>ハ</sub>者喩<sub>ルニ</sub>

父查一、為祖父大足、雖用之、為孫小足、不中用也、當世人追甘跡、欲修聖道門、事亦復如是、此云道綽一意也、或文如祖父、云、

レ之如祖父履一、祖父大足、兒孫小足、其履不レ可用也、今人欲下追昔賢之跡、修聖道門、上亦復如是、此道綽禪師意也、或文如祖父、

(ト) 私云、臨終記雖非上人之語、同在見聞、為令二人取信、同載之者也、見者得レ意、

私云、此記雖非上人之語、而附之隨聞之後、庶幾後人視上人臨終之祥瑞、發起信心也、見者得レ心、

(チ) 御教書御請 第三

答博陸問書第三

(リ) 二月廿一日 源空

二月廿三日 源空

(ヌ) 拾遺黑谷語灯録卷上

拾遺黑谷語灯録卷上

(ル) 予廿余年之間、久尋花夷、委駿真偽、所撰集、漢語語

漢語灯録十卷十七章并拾遺語灯録上卷三章都是二十章、

灯録并拾遺都有廿一件矣、此外世有綴集、本願與義一卷、往生機品一卷、注黑谷作、全是偽書也、又有三部經惣章一卷、列四十八願名目、第十八願名二十念往生願一也、問決一卷亦是偽書歟、黑谷遺二鎮西一狀云、金剛宝戒章疑書、源空全以如是事不申候、釈迦弥陀為証云、況復聖道法門也、不能編入淨録一也、管見所レ及取捨如レ斯、若有レ所誤者後覽必糾之、又有レ所遺者乞続之矣、

此予二十年来徧索、此於華夷、慎揜真偽、而所撰集也、此外世間所流本願與義一卷、往生機品一卷、称黑谷作一者、即偽書也、又有三部經、惣章、列四十八願名目、第十八願名二十念往生願一者、及問決一卷、金剛宝戒章三卷上并亦偽書也、上人與二鎮西一書曰、金剛宝戒章是偽書也、予不製、如是書、釈迦弥陀以為灯明云、況又捫理而論、宝戒所レ述乃是聖道法門、而非上人之所作一者著明矣、今則管見所レ及取捨如レ斯、若有二舛差、後賢糾之、又有二子遺来哲続之、

(ヲ) 私云、中下兩卷之和語流布之語、灯録六七卷全同、故略

又拾遺語灯本有三卷、但中下兩卷和語、而与和字語灯

不<sup>レ</sup>書<sup>レ</sup>之、三卷欲<sup>セハ</sup>全部<sup>ナラド</sup>一 録第六第七卷<sup>一</sup>其事全<sup>ク</sup>同、故<sup>ニ</sup>者、以<sup>二</sup>彼六七卷<sup>ヲ</sup>可<sup>レ</sup>次<sup>レ</sup>之 今略<sup>ノ</sup>不<sup>レ</sup>載<sup>レ</sup>之、若欲<sup>セハ</sup>二三卷<sup>ニ</sup>者也、 全備<sup>セシ</sup>一以<sup>二</sup>彼六七兩卷<sup>ヲ</sup>一統<sup>ニ</sup>次<sup>ス</sup> 于茲<sup>ニ</sup>焉、

順を追って見ていくと、(イ)(ロ)は最初に所収される「三昧発得記」の内題と尾題の部分であるが、まず両本ともに題目の下に所収順を示す「第二」という記述がある。大徳寺本はその内題につづいて「黒谷自筆記」との註記があるが、正徳版では(ロ)の尾題につづいて同様の記述が確認される。(ハ)は大徳寺本が「御夢記」、正徳版が「夢感聖相記」と題する記録の末尾に記される日付と署名であるが、双方まったく共通した体裁の記述となっている。(ニ)は同様に大徳寺本が「浄土宗見聞」、正徳版が「浄土随聞記」と題する記録の内題につづいて、両本ともに「第二」と記しその下部に「勢観上人記」「勢観上人著」なる註記が存する体裁は共通するものである。(ホ)はその「浄土宗見聞」「浄土随聞記」両本の第十九問、月輪禪定殿下のところに参じた時に住山の者への説示を記す箇所の末尾にある註記の部分であるが、両本ともに共通している。(ヘ)は(ホ)につづいて記され第二十問、聖道門を祖父の沓や弓に喩えた説示であるが、この(ホ)(ヘ)ともに『醍醐本』の該当箇所には記述が確認できない部分で

あり、その意味において大徳寺本・正徳版両本に共通性があると言える。(ト)は大徳寺本が「臨終日記」、正徳版が「臨終祥瑞記」と題する記録の末尾にある註記の部分であるが、このように内容的には少し変えられてはいるが体裁のうえでは共通している。(チ)は大徳寺本が「御教書御請」、正徳版が「答博陸問書」と題する記録の内題につづいて、両本ともに「第三」という所収順の記述を記している。(リ)はその日付と署名であるが、大徳寺本が「二月廿一日」、正徳版が「二月廿三日」というように記述に相違が認められるが、その体裁についてはまったく共通している。(ヌ)は両本の末尾にある『拾遺漢語灯録』自体の尾題であるが、これは両本ともに合致する記述となっている。そして、この後に(ル)に掲げるような編者の奥書がある。これも両本を比較すると語句の表現はかなり相違するが内容的にはほぼ一致している。さらに、(フ)は大徳寺本の奥書に付記されている註記であるが、同様の内容が正徳版では(ル)の奥書につづく形で記されている。このように、大徳寺本と正徳版の記述のなかには、双方の記述内容には大きな隔たりが存するけれども、所収体裁を中心としてかなりの共通性を認めることが出来る。このことはすなわち、どちらかがどちらかの系統の記述を参考として伝襲された可能性を想定しなければならないことを意味するものと言える。



つぎに、前掲した箇所ほかにも大徳寺本には註記が数箇所確認されるが、これらの註記の性格を検討すると、大徳寺本独自の註記、『拾遺漢語灯録』の編者による註記、あるいは記録の原型そのものに存した註記である等の可能性が考えられる。そこで、これらを正徳版や『醍醐本』における該当箇所等を参考に見ていくことにする。まず前掲表のうち(ホ)(ハ)の箇所はつづきの記述であるが、両方とも『醍醐本』所載「一期物語」の該当箇所には見当たらない。このうち(ホ)と(ハ)は『語灯録』の編者すなわち了慧道光による註記であり、(ハ)はもともと所収した遺文の原型に存した記述と考えられる。とくに(ハ)の部分は、法然の語ではないが「見聞」ここでは「浄土宗見聞」の奥に在った記録なので後人のために載せたところのように、『語灯録』の編者が所収する際にその事情を記し置いた記述であったものが、正徳版において「浄土宗見聞」を「浄土随聞記」と改称して引き継がれたものと見られる。大徳寺本独自の註記であると考えられるものをあげると、まず「三昧発得記」冒頭の「七々日念仏記」正本在「三尊院御影堂」文字及點全如「正本」不可「私點等」也なる記述と、「御教書御請」末尾の日付・署名の下部にある「或云、正本在「三尊院」云、可尋之」なる記述は、正徳版にも『醍醐本』にも見られないことから、大徳寺本かその底本の筆記者が註記したものと思われる。問題の箇所は大徳寺本の「浄土宗見聞」の第九問と第十問との間にあるつぎのよ

うな註記である。

私云、是所作時言也、ケ界外カクヘシ、此次下遠州蓮花寺、住持禪勝房造阿弥陀仏云人アリ、上人奉問二十二問答、其書有之、雖然和語第十四卷末見、依繁不載之、

これは『拾遺漢語灯録』の原本には、遠州蓮花寺住持禪勝房造阿弥陀仏なる者との間に交わされた「十二箇条問答」が掲載されていたことを意味する註記であり、梶村氏はこの「十二箇条問答」は「三心料簡事」とともに、鐫木光明寺良求奥書に見られる建武四年の老宿達の治定に際して削除されたと主張される。実際に『醍醐本』によって確認してみると、この註記がある箇所は「一期物語」の丁度真ん中であり、「或時遠江国蓮花寺住僧禪勝房参上人奉問種々之事上人一々答之」として始まる十一箇条の問答と、その最後尾につづいて所収される「三心料簡事」の記述はまだかなり先ではあるが、大徳寺本の註記に「界外ニカクヘシ」とあるように、ここではとくに所作の時のことと関係してこの第九問の記述に対して記されたものと考えられる。そして、この「浄土宗見聞」のつぎに「十二箇条問答」が所収されていたことになる。しかし、この「十一箇条問答」が『醍醐本』の「三心料簡事」とともに建武四年に削除された

とするには少し無理がある。それは「三心料簡事」が所収されていたことを示す註記があるわけではない点、さらにはこの註記に「界外ニカクヘシ」とあつて、もともとは界の外すなわち頭註もしくは脚註としてあつた註記をこのように記したことが分かるからである。それは、やはり大徳寺本書の時点でもしくは大徳寺本が底本とした転写本の筆者等によって行われたものと考えられるのである。

各記録の原型にすでにあつたのではないかと想定される記述として、大徳寺本所収の「三昧発得記」冒頭の註記につづいてあるつぎの部分である。

元久三年正月四日念仏之間<sup>ニ</sup>三尊共現<sup>ニ</sup>大身<sup>一</sup>、又五日<sup>ニ</sup>初生丑年也、生年六十有六也、午年也、

このうち前半部の記述は、正徳版所収「三昧発得記」では最末尾に、「元久三年正月朔日勤<sup>ニ</sup>修恒例<sup>一</sup>七日念仏、至<sup>ニ</sup>第四日<sup>一</sup>念仏之間、阿弥陀仏観音勢至<sup>ニ</sup>三尊共現<sup>ニ</sup>大身<sup>一</sup>、五日復現<sup>一</sup>」とある部分に当たり、また『醍醐本』においてもいわゆる「三昧発得記」の末尾部分に、「元久三季正月四日念仏之間、三尊現大身<sup>一</sup>、又五日如前<sup>ニ</sup>云々<sup>一</sup>」とある記述と共通している。後半部分の記述は正徳版所収「三昧発得記」では、冒頭の内題下部にあ

る「<sup>長承二年癸丑誕生、至<sup>ニ</sup>千建久九年戊午<sup>一</sup>年六十有六、</sup>」なる記述と共通しており、また『醍醐本』所収の「三昧発得記」では最初の「御生季当六十<sup>六、</sup>」<sup>長承二季癸丑誕生、</sup>に当たるなど、大徳寺本所収「三昧発得記」冒頭のこれらの記述は、もともとの「三昧発得記」の記述がどこかの時点で改変されて出来上がったものと想定されるわけである。つぎに、大徳寺本所収「浄土宗見聞」の第十七問と第十八問との間につぎのような註記がある。

(勢観上人  
私云、此言<sup>ノ</sup>下聊有<sup>ニ</sup>三所存<sup>一</sup>欤、選択集已<sup>ニ</sup>以<sup>ニ</sup>真言仏心<sup>一</sup>入<sup>ニ</sup>聖道<sup>一</sup>、捨<sup>ニ</sup>聖道門<sup>一</sup>入<sup>ニ</sup>浄土宗<sup>一</sup>、对<sup>ニ</sup>念仏<sup>一</sup>而廢<sup>レ</sup>之給、其智恵深遠<sup>ナル</sup>事不<sup>レ</sup>可<sup>ニ</sup>勝計<sup>一</sup>欤、

これと共通する記述は正徳版所収「浄土随聞記」の該当箇所には確認できないが、『醍醐本』所収「二期物語」の該当箇所に、註記ではなく本文に混入する形で「私云、此言<sup>ノ</sup>下聊有<sup>ニ</sup>三所存<sup>一</sup>欤、選択集已<sup>ニ</sup>以<sup>ニ</sup>真言仏心<sup>一</sup>入<sup>ニ</sup>聖道門<sup>一</sup>為<sup>ニ</sup>浄土宗教相<sup>一</sup>、以<sup>ニ</sup>聖道門<sup>一</sup>对<sup>ニ</sup>浄土門<sup>一</sup>而廢<sup>レ</sup>之給、其智恵深遠<sup>ナル</sup>事言語道断者欤、」とある。この記述にはとくに「私云」を「勢観上人」と記しているが、これが大徳寺本かあるいは大徳寺本の底本の筆者によるものであるのか、または『醍醐本』所収「二期物語」系統の記述から転写した際に記されたものなのかが問題となってくる。これは

今の時点で確実な徴証が得られるわけではないが、『醍醐本』所収「一期物語」の方が表現上理解し易いことや、『醍醐本』自体が醍醐三寶院義演の門弟達によって行われた聖教類書事業の一環であつたことを予測させる程正鶴を得たものでない点等を考慮すると、もともとの原型からこのような註記が存し、『醍醐本』では転写の際に本文と同様に扱われたものと考えるのが妥当であろう。さらに、大徳寺本所収「浄土宗見聞」の第十九問に「住山者一人参会、聊有憚不載其名」なる割註があるが、これは正徳版所収「浄土随聞記」の該当箇所には記述が確認できないが、『醍醐本』所収「一期物語」の該当箇所には、「聊有憚不載其名」との同様の割註が存する。これも恐らくは原型からこのようにあつたものと想定される。

このように、大徳寺本・正徳版・『醍醐本』という三本の記述を比較検討して言えることは、大徳寺本と正徳版は所収遺文に第一・第二・第三という編数を記したり、その第一・第二に「付」と称して別記を付記するなど、また前掲表に示すとおり所収体裁を中心として共通性があることが認められる。言うまでもなく正徳版の記述内容は大徳寺本のそれと大きく隔っており、むしろ『醍醐本』の対応する記録の記述内容に近似している。しかしながら、大徳寺本に数箇所確認される註記を検討すると、それは大徳寺本かその底本の筆記者によって加えられた

註記と、『拾遺漢語灯録』の編者の註記、あるいは『醍醐本』にさらに遡る原型からすでに存した可能性のある註記等に分けられるのである。このことは大徳寺本系統の記述が、少なくとも現在伝襲される『醍醐本』の記述によって近世になって再編されたものではなく、中世に遡って記述が存在したことを証することとなり、正徳版はそうした系統の『拾遺漢語灯録』を底本として良照義山により改変されたものであることを証することになる。その編集に際して原型の『醍醐本』を参考としたことも、あるいは同一系統の記録をもとに収録したことも充分に想定出来るところである。

#### 四

大徳寺本所収本のうち『醍醐本』と対応する「三昧発得記」(『御臨終日記』後半部)、「一期物語」、「御臨終日記」前半部の各記述について、大徳寺本の各該当箇所と比較検討してみると、よく共通してはいるがそれは必ずしも大徳寺本が『醍醐本』を底本としたというような直接的な関係として想定することは難しい。そこで、筆者は大徳寺本や『醍醐本』に更に遡る記述の存在として、康元元年(一二五六)から翌二年にかけて親鸞によって書写されて伝来する『指南抄』所収の該当遺文・記録と

の比較対照が必要であることを提言する。

『指南抄』所収文献のうち大徳寺本と対応するものは、中巻<sup>(6)</sup>本所収「建久九年正月一日記」、同「法然聖人御夢想記」、同「法然聖人臨終行儀」の三本である。このうち『醍醐本』にも所収されている「建久九年正月一日記」「法然聖人臨終行儀」について、『醍醐本』『指南抄』各所収本の記述を大徳寺本と比較対照し、それぞれの相違点を左に表示する（対照箇所を示すために大徳寺本に傍点を付す）。

〔建久九年正月一日記〕

大徳寺本

『醍醐本』

『指南抄』中巻本

(1) 建久九年正月一日記	建久九年正月一日	建久九年正月一日記
(2) 申・時計恒例正月七日 念仏始 <sup>ハ</sup> 行 <sup>ハ</sup> 之 <sup>ハ</sup>	未時恒例 <sup>ニ</sup> 毎月七日念 仏始行 <sup>ハ</sup> 之 <sup>ハ</sup>	未申ノ時ハカリ恒例正 月七日念仏始行セシメ タマフ、
(3) 自 <sup>レ</sup> 例甚明 <sup>云</sup> 云、	自然 <sup>ト</sup> 甚明也、	自然アキラカナリト云 <sup>云</sup> 、
(4) 水想観自然成就 <sup>云</sup> 云、	水想観自然成就 <sup>云</sup> 云、	水想観自然ニコレヲ成 就シタマフ云 <sup>云</sup> 、

(5) 七日・重又現 <sup>レ</sup> 之、	七日朝重 <sup>テ</sup> 又現 <sup>レ</sup> 之、	七日朝ニマタカサネテコ レヲ現ス、
(6) 即 <sup>レ</sup> 以 <sup>レ</sup> 此宮殿 <sup>ヲ</sup> ・顯 <sup>レ</sup> 其相 <sup>ヲ</sup> 現 <sup>レ</sup> 之、	即似宮殿 <sup>ノ</sup> 類 <sup>ニ</sup> 其相現 <sup>レ</sup> 之、	スナワチコノ宮殿ヲモ テ、ソノ相影現シタマ フ、
(7) 二月廿八日依 <sup>レ</sup> 病念仏 退 <sup>レ</sup> 之、一万遍或二万 返 <sup>レ</sup> 之、	二月廿八日依 <sup>レ</sup> 病 <sup>(病)</sup> 念仏延 <sup>ニ</sup> 之、一万或二万反 <sup>ニ</sup> 、	二月廿八日病ニヨテ念 仏コレヲ退ス、一万返 アルイハ二万、
(8) 右眼 <sup>ヨリ</sup> 其後 <sup>ニ</sup> 有 <sup>ニ</sup> 光明 <sup>ニ</sup> 甚也、	左眼 <sup>ニ</sup> 其後 <sup>ニ</sup> 有 <sup>ニ</sup> 光明放 <sup>コト</sup> 、	右眼ニソノ、チ光明ア リ、ハナタナリ、
(9) 又光端 <sup>シ</sup> 青、又眼 <sup>ニ</sup> 有 <sup>ニ</sup> 瑠 璃、其形如 <sup>ニ</sup> 瑠璃壺 <sup>ニ</sup> 、 有 <sup>ニ</sup> 赤花如 <sup>ニ</sup> 宝瓶 <sup>ニ</sup> 、	又光端 <sup>シ</sup> 赤、又眼 <sup>ニ</sup> 有 <sup>ニ</sup> 瑠璃 <sup>ニ</sup> 、 其眼如 <sup>ニ</sup> 瑠璃壺 <sup>ニ</sup> 、々々々 有 <sup>ニ</sup> 赤花如 <sup>ニ</sup> 宝瓶 <sup>ニ</sup> 、	マタ光アリ、ハシアカ シ、マタ眼ニ瑠璃アリ、 ソノ形瑠璃ノ壺ノコト シ、瑠璃ニ赤花アリ、 宝形ノコトシ、
(10) 見 <sup>ル</sup> ニ四方 <sup>ヲ</sup> ・皆每 <sup>レ</sup> 方有 <sup>ニ</sup> 赤青宝樹 <sup>ニ</sup> 、	見 <sup>ル</sup> ニ四方 <sup>ヲ</sup> ・有 <sup>ニ</sup> 赤有青宝樹 <sup>ニ</sup> 、	四方ミナ方コトニ赤青 宝樹アリ、
(11) 其高無 <sup>レ</sup> 定、高下随意 <sup>ニ</sup> 、	其高無定、高下随喜 <sup>ニ</sup> 、	ソノ高サタマリ <sup>ナシ</sup> 、高下 コ、ロニシタカフテ、

<p>(12) 或四五丈或三十三丈<small>云々</small>、或四五丈或三丈<small>云々</small> アルイハ四五丈、アル イハ三十三丈ト云、</p>	<p>(13) 八月一日ヨリ如本六万 返始之、 八月一日如本一七万返 始之、 八月一日日本ノコトク六 万返コレヲハシム、</p>	<p>(14) 及三九月廿二日朝地 想分明影現、周圍七八 段計也、 及九月廿二日朝地想分 明現、周圍七八段許也、 り、</p>	<p>(15) 正治二年二月之比、地 想等五觀行住坐臥隨 心任運現之<small>云々</small>、 正治二年二月ノコロ、 地想等ノ五觀、行住座 臥コ、ロニシタカフテ、 任運コレヲ現スト<small>云々</small>、</p>	<p>(16) 建仁元年二月八日後 夜聞鳥音、 建仁九年二月八日後夜 聞鳥舌、 建仁元年二月八日ノ後 夜ニ鳥ノコエヲキク、</p>	<p>(17) 笙音等聞之、 シヤウノオトラコレヲ キク、</p>	<p>(18) 丈六計、勢至御面現、 丈六許御面現<small>云々</small>、 丈六ハカリノ勢至ノ御 面像現セリ、</p>	<p>(19) 以之推之、面持仏 西持仏堂勢至菩薩形、 コレヲモテコレヲ推ス</p>
<p>堂勢至菩薩形、丈六、 出現、 丈六面現、 ル、西ノ持仏堂ニテ勢 至菩薩、形像ヨリ丈六 ノ面ヲ出現セリ、</p>	<p>(20) 是則推之此菩薩 是則此菩薩 コレスナワチコレヲ推 スルニ、コノ菩薩ステ ニモテ、</p>	<p>(21) 今為念仏者示現其 形、 今為念仏者ノタメニ、 ソノカタチヲ示現シタ マヘリ、</p>	<p>(22) 同第二日始座処下四 方一段計、 同廿六日始座処下四 方一段計、 同六日ハシメテ、座処 ヨリ四方一段ハカリ、</p>	<p>(23) 建仁二年十二月廿八日 高島少將殿来、 建仁二年二月廿一日高 島少將殿、 建仁二年十二月廿八日 高島小將キタレリ、</p>	<p>(24) 透過仏面示現、大如 丈六面、即亦隱給畢、 徹通仏面而現、大如長 ヲ現シタマフ、丈六ノコ トシ、仏面スナワチマタ 隱タマヒ了、</p>	<p>(25) 廿八日午時之事也、 廿八日午時也、 廿八日午時ノ事也、</p>	

(26) 已三昧発得記畢、

〔法然聖人臨終行儀〕

大徳寺本

〔醍醐本〕

〔指南抄〕中巻本

(1) 建久元年十一月十七日  
可入洛之由賜宣旨、  
藤原中納言光親奉也、

建暦元年十一月十七  
日可入洛之由賜宣旨、  
藤原中納言光親奉也、

建暦元年十一月十七  
日藤原中納言光親卿ノ  
奉ニテ、院宣ニヨリテ、

(2) 凡此三年耳、溺心・瞤味  
也、然而死期已近如  
昔分明也、

凡此三年耳ヲボロニ  
心瞤味也、然死期已近  
如昔耳目分明也、

オホカタコノ二三年ノ  
ホトオイホレテ、ヨロツ  
モノワスレナトセラレケ  
ルホトニ、コトシヨリハ  
耳モキ、コ、ロモアキラ  
カニシテ、トシコロナラ  
ヒオキタマヒケルトコロ  
ノ法文ヲ、時時オモヒ  
イタシテ、弟子トモニ  
ム□ヒテ談義シタマヒ  
ケリ、

(3) 我本在天竺・交・声聞  
僧・常・行・頭陀、其後來  
日本国・入・天台宗、又  
弘念仏、

我本在天竺・交・声聞  
僧・常・行・頭陀、其後來  
本國入天台宗、又勸  
念仏、

ワレハモト天竺・アリテ、  
声聞僧ニマシワリテ頭  
陀行セシミノ、コノ日  
本・キタリテ、天台宗入、

(4) 弟子問、可令往生極樂給  
哉、

弟子問云、可令往生極  
樂哉、

マタコノ念仏ノ法門・ア  
エリトノタマヒケリ、  
ヒトリノ僧アリテ、ト  
ヒタテマツリテ申スヤ  
ウ、極樂ヘハ往生シタ  
マフヘシヤト申ケレハ、

(5) 唱此仏名号者不虛、

唱此仏名者不虛云、

名号ヲトナエムモノ、  
ヒトリモムナシキ事ナ  
シトノタマヒテ、

(6) 又觀音勢至菩薩衆在前  
拜之否、

又觀音勢至菩薩聖衆在  
前拜之乎否、

觀音勢至菩薩聖衆マヘ  
ニ現シタマフオハ、ナ  
ムタチオカミタマツ  
ルヤトノタマフニ、

(7) 其時勸可拜奉本尊  
給之由、上人以指指  
虚空、此外又有念仏、

コノ御仏ヲカミマイラ  
セタマフヘシト申侍ケ  
レハ、聖人ノタマハク、  
コノ仏ノホカニマタ仏  
オハシマスカトテ、ユ  
ヒラモテムナシキトコ  
ロヲサシタマヒケリ、

其時可拜本尊之由奉  
勸、上人以指々空、此外  
又有念仏、

(8) 此十余年念仏之功積奉 <sub>レ</sub> 拜 <sub>二</sub> 極樂莊嚴 <sub>一</sub> 菩薩 <sub>二</sub> 事是常也 <sub>一</sub> 、	此十余季奉拜極樂莊嚴化仏菩薩 <sub>二</sub> 事是常也 <sub>一</sub> 、	コノ十余年ヨリ、念仏ノ功ツモリテ、極樂ノアリサマミタマツリ、仏菩薩ノ御スカタラツネニミマイラセタマヒケリ、
(9) 又 <sub>レ</sub> 仏御手付 <sub>二</sub> 五色糸 <sub>一</sub> 勸 <sub>二</sub> 取 <sub>レ</sub> 之 <sub>一</sub> 給 <sub>二</sub> 者 <sub>一</sub> 、如是事者大様事也云終不 <sub>レ</sub> 取、	又御手付 <sub>二</sub> 五色糸 <sub>一</sub> 可令執之給之由勸者、如此事是大様事也云終不 <sub>レ</sub> 取、	仏ノ御手ニ、五色ノイトヲカケテ、コノヨシヲ申シ侍ケレハ、聖人コレハオホヤウノコトノイハレソ、カナラスシモサルヘカラストソノタマヒケル、
(10) 同廿日己 <sub>レ</sub> 時 <sub>二</sub> 当 <sub>二</sub> 坊上 <sub>一</sub> 紫雲 <sub>二</sub> 雲中有 <sub>二</sub> 同 <sub>一</sub> 形雲、	又同廿日己時、大谷房ノ上アタリテ、アヤシキ雲西東ヘナオクタナヒキテ侍中ニ、ナカサ五六丈ハカリシテ、ソノ中ニマロナルカタチアリケリ、	同廿日己時 <sub>二</sub> 当 <sub>二</sub> 坊上 <sub>一</sub> 紫雲 <sub>二</sub> 雲中有 <sub>二</sub> 円 <sub>一</sub> 戒雲、
(11) 往 <sub>レ</sub> 道人々於 <sub>二</sub> 処々 <sub>一</sub> 見 <sub>レ</sub> 之、	行道 <sub>二</sub> 人々於 <sub>二</sub> 処々 <sub>一</sub> 見 <sub>レ</sub> 之、	ミチラスキユク人々、アマタトコロニテミアヤ
(12) 弟子云、虚空紫雲已 <sub>レ</sub> 聳 <sub>二</sub> 、御往生近付給 <sub>レ</sub> 歎 <sub>一</sub> 、上人云、善事哉、	弟子云、此 <sub>二</sub> 紫雲已 <sub>レ</sub> 聳 <sub>一</sub> 、御往生近給歎 <sub>一</sub> 、上人云、善事哉、	シミテオカミ侍ケリ、アル御弟子申テイフヤウ、コノ上ニ紫雲タナヒケリ、聖人ノ往生ノ時チカツカセタマヒテ侍カト申ケレハ、聖人ノタマハク、アハレナル事カナトタビ <sub>レ</sub> ノタマヒテ、
(13) 人皆尋 <sub>レ</sub> 之奉 <sub>レ</sub> 問 <sub>二</sub> 仏御覽 <sub>一</sub> 歎 <sub>二</sub> 、答然也 <sub>一</sub> 、	人皆奇之 <sub>二</sub> 奉 <sub>レ</sub> 問 <sub>二</sub> 仏在 <sub>一</sub> 歎 <sub>二</sub> 、然也答 <sub>一</sub> 、	人ミナアヤシミテ、タ、事ニハアラス、コレ証相ノ現シテ、聖衆ノキタリタマフカトアヤシミケレトモ、ヨノ人ハナニトモコ、ロエス侍ケリ、
(14) 在 <sub>二</sub> 西山 <sub>一</sub> 炭焼十余人見 <sub>レ</sub> 之来 <sub>レ</sub> 即 <sub>レ</sub> 語、又自 <sub>二</sub> 広隆寺 <sub>一</sub> 下向 <sub>二</sub> 尼於 <sub>二</sub> 路頭 <sub>一</sub> 来 <sub>レ</sub> 頭 <sub>二</sub> 見 <sub>レ</sub> 来 <sub>レ</sub> 而語 <sub>一</sub> 、	在 <sub>二</sub> 西山 <sub>一</sub> 炭焼十余人見 <sub>レ</sub> 之 <sub>二</sub> 来 <sub>レ</sub> 而語 <sub>一</sub> 、又從 <sub>二</sub> 庄隆 <sub>一</sub> 樵夫トモ十余人ハカリミタリケルカ、ソノ中ニ一人マイリテ、コノヨシクワシク申ケレハ、カノマサシキ臨終	西ノ山ノ水ノ尾ノミネニミエワタリケルヲ、樵夫トモ十余人ハカリミタリケルカ、ソノ中ニ一人マイリテ、コノヨシクワシク申ケレハ、カノマサシキ臨終

(15) 殊強盛高声念仏給事或一時或半時也、	殊強盛高声念仏事或一時或二時、	ノ午ノ時ニツアタリケル、マタウツマサニマ イリテ下向シケルアマ モ、コノ紫雲オハオカ ミテ、イソキマイリテ ツケ申侍ケル、
(16) 自廿四日酉時至二同廿五日午時、	自廿四日酉時至廿五日、	コトニツネヨリモツヨ ク高声念仏ヲ申タマヒ ケル事、或ハ一時、或 ハ半時ハカリナトシタ マヒケルアヒタ、 マタオナシキ廿四日ノ 酉時ヨリ廿五日ノ巳時 マテ、
(17) 漸細高声時々相交、雖然高声念仏無絶、弟子五六人番々助音、	高声念仏無絶、弟子五 六人番々助音、	聖人高声念仏ヲヒマナ ク申タマヒケレハ、弟 子トモ番ニカワリテ、一 時ニ五六人ハカリコエ ヲタスケ申ケリ、ステ 二年時ニイタリテ、念 仏シタマヒケルコエス コシヒクナリニケリ、
(18) 誦ニ光明遍照十方世界念仏衆生撰取不捨之文、如眠命終給、	ソノ、チヨロツノ人々 キオイアツマリテ、オ カミ申コトカリナシ、	サリナカラ、時々マタ 高声ノ念仏マシワリテ キコエ侍ケリ、 誦光明遍照十方世界念 仏衆生撰取不捨、如眠 命終、
(19) 諸人競来拜之猶如盛市、	ソノ、チヨロツノ人々 キオイアツマリテ、オ カミ申コトカリナシ、	諸人競来拜之供如盛 市、

「建久九年正月一日記」の対照では、三本のうち相違箇所と認められるそのほとんどが大徳寺本と『醍醐本』においては、わずかな例を除いては相違するにもかかわらず、大徳寺本と『指南抄』の記述とは一致している。大徳寺本の記述で『醍醐本』とだけ共通する箇所としては、(7)「或二万返」(大徳寺本、以下同じ)、(9)「如宝瓶」、(10)「見四方」、(23)「高畠少将殿」、(24)「大如丈六面」をあげるのみである。『醍醐本』と『指南抄』とだけが一致する記述としては、(5)「七日朝」(醍醐本、以下同じ)、(9)「光瑞赤」「々々々有赤花」の部分のみである。このように、「建久九年正月一日記」いわゆる「三昧発得記」においては、大徳寺本の記述形成には『醍醐本』の影響というよりは『指南



抄」所収本との関係を想定しなければならない。つぎに「法然聖人臨終行儀」の方であるが、この場合は前例と違って大徳寺本と『醍醐本』との記述は全体的には共通している。『指南抄』だけが他の二本とは違い文体になりに多くの記述が付加されている。これを文字どおり後の付加と考えるか、逆に『指南抄』本系の記述から他の二本の記述に縮小されていったのかは一概には断じられない。とくに(3)「其後來日本入天台宗」(大徳寺本、以下同じ)、(5)「唱此仏名号者」、(8)「此十余年念佛之功積」、(11)「往道人々」、(15)「或一時或半時」、(17)「漸細高声時々相交、雖然高声念佛無絶」等の部分においては、『醍醐本』とは相違し『指南抄』と共通している。このことは、少なくとも『醍醐本』の記述がそのまま大徳寺本となったということではないことを意味するものである。

ところで、大徳寺本においても「臨終記」には前掲(19)の記述について「或人七八年前感靈夢」として記述の付加があるが、この記述は『指南抄』が「法然聖人臨終行儀」について、「聖人御事アマタ人々夢ニミタテマツリケル事」(以下、「聖人御事諸人夢記」と称す)を所収しており、中宮の大進兼高以下丹後国しらぶ庄別所の和尙に至る一六件のいわゆる靈夢の記事を集録するうち、その最初の記事である中宮の大進兼高の夢想記事を土台として形成されたものであることが確実である。これ

に釈尊滅後百年の阿育王仏心開悟の物語、さらには『醍醐本』編者の附記と見られる記述等を掲載しているわけであるが、その体裁については『醍醐本』を踏襲した形となっている。また正徳版『拾遺漢語灯録』ともまったく一致している。これは『醍醐本』所収本の形成過程において『指南抄』所収本の原型をなす記述の影響を受けていたことを間違いない証することになるものであり、また梶村氏が説かれるとおり大徳寺本が『醍醐本』の影響によって成立している可能性を示すことになる。

『指南抄』所収本にもう一点「法然聖人御夢想記」がある。『醍醐本』には対応するものがないが、これを大徳寺本所収「夢記」と対照してみたい。短かい記録なので全文を左に掲げる。

#### 大徳寺本「夢記」

##### 御夢記

或夜夢、有二大山、其峯極高、南北長遠、向西方山根、有二大河、傍山出北流、南、河原眇々、而不レ知其邊際、林樹滋々、而不レ知其限数、於是源空忽登二山腹、遥視二西方、

#### 『指南抄』中巻本「法然聖人御夢想記」

法然聖人御夢想記 善導御事

或夜夢ニミラク、一ノ大山アリ、ソノ峯キワメテ高、南北ナカクトオシ、西方ニムカヘリ、山ノ根ニ大河アリ、傍ノ山ヨリ出タリ、北ニ流タリ、南ノ河原眇眇トシテソノ邊際ヲシラス、林樹滋滋トシテ、ソノカキリヲシラス、コ、ニ源空タチマチニ山腹ニ登テ、ハルカニ西方ヲ

自<sup>ニ</sup>地<sup>ニ</sup>已<sup>ニ</sup>上<sup>ニ</sup>五十尺計<sup>リ</sup>上<sup>リ</sup>昇<sup>ル</sup>、空<sup>ニ</sup>中<sup>ニ</sup>有<sup>ニ</sup>一<sup>ニ</sup>聚<sup>ニ</sup>紫雲<sup>ニ</sup>、以<sup>テ</sup>為<sup>ス</sup>何<sup>レ</sup>處<sup>ニ</sup>有<sup>ニ</sup>二<sup>ニ</sup>往生人<sup>ニ</sup>哉、爰<sup>ニ</sup>紫雲<sup>ニ</sup>飛<sup>ニ</sup>至<sup>ニ</sup>於<sup>ニ</sup>我<sup>ニ</sup>前<sup>ニ</sup>、為<sup>ス</sup>希<sup>ニ</sup>有<sup>ニ</sup>之<sup>ニ</sup>思<sup>ニ</sup>、即<sup>チ</sup>自<sup>ニ</sup>紫雲<sup>ニ</sup>之<sup>ニ</sup>中<sup>ニ</sup>孔雀鸚鵡等<sup>ニ</sup>之<sup>ニ</sup>衆<sup>ニ</sup>鳥<sup>ニ</sup>飛<sup>ニ</sup>出<sup>ニ</sup>、遊<sup>ニ</sup>戲<sup>ニ</sup>河原<sup>ニ</sup>一<sup>ニ</sup>幅<sup>ニ</sup>沙<sup>ニ</sup>戲<sup>ニ</sup>濱<sup>ニ</sup>、見<sup>ニ</sup>此<sup>ニ</sup>等<sup>ニ</sup>鳥<sup>ニ</sup>、是<sup>レ</sup>非<sup>ニ</sup>自<sup>ニ</sup>身<sup>ニ</sup>放<sup>ニ</sup>光<sup>ニ</sup>照<sup>ニ</sup>曜<sup>ニ</sup>無<sup>レ</sup>極<sup>ニ</sup>、其<sup>レ</sup>後<sup>ニ</sup>飛<sup>ニ</sup>昇<sup>ニ</sup>如<sup>レ</sup>本<sup>ニ</sup>入<sup>ニ</sup>紫雲<sup>ニ</sup>中<sup>ニ</sup>一<sup>ニ</sup>畢<sup>ニ</sup>、爰<sup>ニ</sup>此<sup>ニ</sup>紫雲<sup>ニ</sup>不<sup>レ</sup>住<sup>ニ</sup>此<sup>ニ</sup>所<sup>ニ</sup>、過<sup>ニ</sup>而<sup>ニ</sup>向<sup>ニ</sup>北<sup>ニ</sup>隱<sup>ニ</sup>山<sup>ニ</sup>河<sup>ニ</sup>一<sup>ニ</sup>畢<sup>ニ</sup>、又<sup>ニ</sup>以<sup>テ</sup>為<sup>ス</sup>山<sup>ニ</sup>東<sup>ニ</sup>有<sup>ニ</sup>二<sup>ニ</sup>往<sup>ニ</sup>生<sup>ニ</sup>人<sup>ニ</sup>哉、如<sup>レ</sup>是<sup>ニ</sup>思<sup>ニ</sup>惟<sup>ニ</sup>之<sup>ニ</sup>間<sup>ニ</sup>、須<sup>ニ</sup>臾<sup>ニ</sup>還<sup>ニ</sup>來<sup>ニ</sup>即<sup>チ</sup>住<sup>ニ</sup>於<sup>ニ</sup>我<sup>ニ</sup>前<sup>ニ</sup>、自<sup>ニ</sup>紫雲<sup>ニ</sup>中<sup>ニ</sup>着<sup>ニ</sup>墨<sup>ニ</sup>染<sup>ニ</sup>之<sup>ニ</sup>衣<sup>ニ</sup>一<sup>ニ</sup>僧<sup>ニ</sup>一<sup>ニ</sup>人<sup>ニ</sup>飛<sup>ニ</sup>下<sup>ニ</sup>住<sup>ニ</sup>留<sup>ニ</sup>我<sup>ニ</sup>立<sup>ニ</sup>處<sup>ニ</sup>之<sup>ニ</sup>許<sup>ニ</sup>、即<sup>チ</sup>為<sup>ス</sup>恭<sup>ニ</sup>敬<sup>ニ</sup>一<sup>ニ</sup>步<sup>ニ</sup>下<sup>ニ</sup>、立<sup>ニ</sup>僧<sup>ニ</sup>足<sup>ニ</sup>下<sup>ニ</sup>一<sup>ニ</sup>瞻<sup>ニ</sup>仰<sup>ニ</sup>此<sup>ニ</sup>僧<sup>ニ</sup>者<sup>ニ</sup>、身<sup>ニ</sup>上<sup>ニ</sup>半<sup>ニ</sup>肉<sup>ニ</sup>身<sup>ニ</sup>即<sup>チ</sup>僧<sup>ニ</sup>形<sup>ニ</sup>也、身<sup>ニ</sup>下<sup>ニ</sup>半<sup>ニ</sup>金<sup>ニ</sup>色<sup>ニ</sup>如<sup>ニ</sup>一<sup>ニ</sup>仏<sup>ニ</sup>身<sup>ニ</sup>一<sup>ニ</sup>也、爰<sup>ニ</sup>源<sup>ニ</sup>空<sup>ニ</sup>合<sup>ニ</sup>掌<sup>ニ</sup>低<sup>ニ</sup>首<sup>ニ</sup>言<sup>ニ</sup>、是<sup>レ</sup>誰<sup>ニ</sup>人<sup>ニ</sup>來<sup>ニ</sup>哉、答<sup>ニ</sup>曰<sup>ニ</sup>、我<sup>ニ</sup>是<sup>ニ</sup>善<sup>ニ</sup>導<sup>ニ</sup>也、又<sup>ニ</sup>問<sup>ニ</sup>曰<sup>ニ</sup>、為<sup>レ</sup>何<sup>ニ</sup>故<sup>ニ</sup>來<sup>ニ</sup>哉、

ミレハ、地ヨリ已上五十尺ハカリ上ニ昇テ、空中ニヒトムラノ紫雲アリ、以テ、何所ニ往生人ノアルソ哉、コ、ニ紫雲トヒキタリテ、ワカトコロニイタル、希有ノオモヒヲナストコロニ、スナワチ紫雲ノ中ヨリ、孔雀・鸚鵡等ノ衆鳥トヒイテ、河原ニ遊戯ス、沙ホリ、濱ニ戯、コレヲノ鳥ミレハ、凡鳥ニアラス、身ヨリ光ヲハナチ、照曜キワマリナシ、ソノチトヒ昇テ、本ノコトク紫雲中ニ入テ、コ、ニコノ紫雲コノトコロニ住セス、コノトコロラスキテ、北ニムカフテ山河ニカクレテ、マタ以テ、山ノ東ニ往生人ノアルニ哉、カクノコトク思惟スルアヒタ、須臾ニカヘリキタリテワカマヘニ住ス、コノ紫雲ノ中ヨリ、クロクソメタル衣着僧一人トヒクタリテ、ワカタチタルトコロノ下ニ住立ス、ワレスナワチ恭敬ノタメニアユミオリテ、僧ノ足ノシモニタチタリ、コノ僧ヲ瞻仰スレハ、身上半ハ肉身、スナワチ僧形也、身ヨリシモ半ハ金色ナリ、仏身ノコトク也、コ、ニ源空合掌低頭シテ問テマフサク、コレ誰人ノ来タ

又答曰、余雖ニ不肖ニ能言ニ專修念仏、甚以テ為レ貴、為レ之故以來也、又問曰、專修念仏之人、皆為ニ往生人哉、未レ承ニ其答ニ之間、忽然而夢覺畢、

建久九年五月二日註之

源空

マフソ哉、答曰、ワレハコレ善導也、マタ問テマフサク、ナニノユヘニ来タマフソ哉、マタ答曰、余不肖ナリトイユトモ、ヨク專修念仏ノコトヲ言、ハナハタモテ貴トス、タメノユヘニモテ来也、マタ問言、專修念仏ノ人ミナモテ為ニ往生人哉、イマタソノ答ヲウケタマハラサルアヒタニ、忽然トシテ夢覺了、

この両本の記述は非常に近いことが確認される。大徳寺本に「傍<sup>ニ</sup>山<sup>ニ</sup>出<sup>ニ</sup>北<sup>ニ</sup>流<sup>ニ</sup>南<sup>ニ</sup>河<sup>ニ</sup>原<sup>ニ</sup>眇<sup>ニ</sup>々<sup>ニ</sup>而<sup>ニ</sup>不<sup>ニ</sup>知<sup>ニ</sup>其<sup>ニ</sup>邊<sup>ニ</sup>際<sup>ニ</sup>」とある箇所は、「指南抄」に「傍ノ山ヨリ出タリ、北ニ流タリ、南ノ河原眇眇トシテソノ邊際ヲシラス」とあるから、大徳寺本の方の返り点の誤りに過ぎないものと見られる。あとは大徳寺本に「至<sup>ニ</sup>於<sup>ニ</sup>我前<sup>ニ</sup>」とある箇所が「指南抄」では「ワカトコロニイタル」とあり、同様に「住<sup>ニ</sup>留<sup>ニ</sup>我<sup>ニ</sup>立<sup>ニ</sup>處<sup>ニ</sup>之<sup>ニ</sup>許<sup>ニ</sup>」とある箇所が「ワカタチタルトコロノ下ニ住立ス」とあり、また「指南抄」にある「コレヲノ鳥ミレハ凡鳥ニアラス」「コノトコロラスキテ」「コノ紫雲ノ中ヨリ」「ワレスナワチ恭敬ノタメニアユミオリテ」の各傍点部分の記述が大徳寺本にはない点、さらには大徳寺本末尾の「建久九年五月二日註之 源空」という日付・署名の記述が

『指南抄』にはない点、以上の相違箇所を除くと全文が合致している。したがって、対応する記録が『醍醐本』にはないので参考としかならないが、大徳寺本の記述について考察するには『指南抄』所収本系の記述との関連性を想定することが必要であると言える。

## まとめ

大徳寺本の記述内容を正徳版『拾遺漢語灯録』をはじめ『醍醐本』の対応する記述、さらには『指南抄』の該当記述等との比較対照を行うことによつて検討を進めてきたわけであるが、まずは大徳寺本に数箇所確認される註記を検討することにより、大徳寺本独自の註記、『拾遺漢語灯録』编者による註記、あるいは遺文・記録の原型そのものに存した註記である等の可能性が考えられた。このことによつて大徳寺本系統の記述の存在をかなり遡らせることが出来るようになったわけである。

そこで、大徳寺本「三昧発得記」と『指南抄』「建久九年正月一日記」の比較対照からは、とくに『醍醐本』所収本との異同箇所に限っては、両者に共通性が認められたが大徳寺本の方の記述との関係が深い。また、大徳寺本「臨終記」と『指南抄』「法然聖人臨終行儀」とではもともと記述の形態が相違してい

るが、とくに『醍醐本』所収本との異同箇所に限るとやはり大徳寺本の方の記述に近い。大徳寺本「夢記」と『指南抄』「法然聖人御夢想記」とでは、両者の記述に密接な関係を想定するほど非常に近いことが判明した。これらのことから、どこかの時点で大徳寺本系統の記述と『醍醐本』系統の記述が存在するようになったと想定することとなり、さらにこれらの両記述に遡った存在として、『指南抄』系統の記述にその原型を求めることが出来るものと考えられた。

正徳版は近世になつて良照義山により、中世から存していた『拾遺漢語灯録』をもとに記述の改変が行なわれて印行されたものである。大徳寺本の検討結果を踏まえると、この大徳寺本の確認によつて、『拾遺漢語灯録』が正徳版に先行し中世に遡つて存在した可能性が提示された意義は非常に大きいと言ふことができる。法然の遺文集ともいふべき『語灯録』の信憑性については従来から決して高い評価を受けてきたわけではない。その最大の焦点となつていたのが『拾遺漢語灯録』の位置付けであり、これに良質の文献が欠けていることが『語灯録』全体の評価を低くしていた大きな因由であつた。大徳寺本は従来の正徳版に先行するものというばかりでなく、『醍醐本』『指南抄』所収本等との比較から原型をかなり忠実に伝えているのではないかと考える。

『和語灯録』『拾遺和語灯録』には元亨版と西法寺藏鎌倉末期写本、『漢語灯録』には浄嚴院藏隆堯書写本、そして『拾遺漢語灯録』にはこの大徳寺本が中世に遡りうる文献として確認出来ることとなったわけである。したがって、大徳寺本の存在は『拾遺漢語灯録』に所収される各遺文・記録の信憑性を高めるとともに、『語灯録』全体の史料的价值を確固たるものにするなど、法然遺文研究の進展に大いに貢献するものと言える。

〔註〕

- (1) 藤原猶雪著『日本仏教史研究』（大東出版社、昭和十三年）所収「徳川時代における法然上人漢語灯録の改竄刊流」、拙著『法然遺文の基礎的研究』（法蔵館、平成六年）第三章第一節「漢語灯録」について」参照。
- (2) 『黒谷上人語灯録（和語）』（龍谷大学善本叢書15、同朋舎、平成七年）参照。
- (3) 西村岡紹「語灯録」（和字）の一考察―新出浄写本を中心として―」（『仏教学会紀要』第二号、平成六年）参照。
- (4) 拙著『法然遺文の基礎的研究』第三章第二節「和語灯録」について」参照。
- (5) 『増上寺史料集』（続群書類従完成会）第六卷所収。
- (6) 『親鸞聖人真蹟集成』（法蔵館）第五卷所収。